

書評

岩田健太郎，豊浦麻記子 著

感染症外来の帰還

感染症コンサルタント

青 木 眞

本書は『感染症外来の帰還』と文学的なタイトルがついているが、優れた内科・小児科領域の感染症に関する外来診療マニュアルである。

自分が80年代前半に渡米し、内科専門のプログラムでインターンとして働き始めたとき、仲間が「メドッピーズ」(英語で Med-Peds と書く)という聞きなれないプログラムの研修医であると聞いた。Med-Peds とは、内科と小児科の両者の訓練を受け、2つの領域の専門医資格を4年間で取得するというプログラムである。都市部における外来診療の核となるべき2つの専門性を一度に短期間で取得できるということで、とくに将来開業をめざす医師たちに人気が高い競争の激しいプログラムであった。内科と小児科、両専門領域の感染症をカバーする本書も外来の実態に即した、現場のニーズにマッチした本である。

さて本書の一部を紹介すると、

まず基本的な構成は「目が赤い」「咽頭痛」「リンパ節腫脹」など日常外来診療で問題になる事項だけが章ごとに整理され、極めて読みやすい。また診療上の基本的なアプローチの仕方、考え方が「ルール」として整理されており、雑多な知識の集積になりやすい危険から本書を守っている。グループに関する「ルール」に「母親に抱っこさせたまま診察…」とある事に感心しつつ、やがて本書の「ルール」が診療上の Pearl でもあることがわかる。これら各所に散らばる Pearl は著者ご自身の経験に加え恩師や仲間からの受け継がれたものもあるに違いない。頻用する検査の適応、使用上のポイントなども現場に即した形で解説され、処方例も懇切丁寧、具体的に好感が持てる。さらに所々に「ケース」として代表的な臨床状況が、その対処法と共に2〜3行で簡潔に提示されている。臨床状況をたったの2〜3行で Essential な

情報に整理・抽出する潔さ、それは研修医が成長する過程でみられる能力であり、よき指導医にみられる資質である。

外来診療は入院診療とは異なる。一般に外来のほうが医師として求められる力量が高く、腕の見せ所が多い。病態が成熟し症状が出揃った時点で潤沢な検査を駆使できる入院担当医(後医)が名医ならば、これら名医になる条件が与えられていない外来診療担当医(前医)には臨床医としてのセンスとルールが頼りである。外来というやり甲斐のある仕事であるが、また失敗や冷や汗と背中合わせの場所に本書が与えられたことは本当に喜ばしい。

個人的な感想を許して頂けるならば、数ある岩田本の中でも本書は Best の1つに入るのはないかと思う。神戸大学に移られ教育者としてさらに経験を積まれた岩田健太郎先生が豊浦麻記子先生という強力な共著者を得られ現場に送られた本書。沖縄県立中部病院の喜舎場 Spirit が伏流水のように流れる好著として推薦致します。

〔A5 頁 488 2010 年 定価
4,935 円(本体 4,700 円+税 5%)
医学書院刊〕